

平成 27 年度 第 3 回みんなで支える森林づくり南信州地域会議

開催日時 平成 28 年 3 月 8 日 (木) 13:30~15:15
開催場所 南信消費生活センター 2 階 大会議室
出席委員 新井座長、伊東委員、林委員、村松委員、矢島委員
事務局 下伊那地方事務所長、林務課長、林務係長ほか

会 議

- (1) 平成 27 年度長野県森林づくり県民税活用事業実施状況について
- (2) 平成 28 年度長野県森林づくり県民税活用事業の概要について

(事務局説明)

(新井座長)

間伐材の搬出が非常に増えているのですが、この搬出された間伐材がどのように使われているのかということと、所有者の同意だとか団地化とかが以前より進んだというようなことがあって、これだけ数量が伸びているのか、あるいは、間伐材をきちんと使っていきましたというような社会的な背景が変わりつつあるのか、お聞きしたい。

(事務局)

搬出材の数量が計画より伸びた要因としては、ひとつ目は、この制度ができて 3 年目ということで、森林組合や事業体の方が周知してきたというのが大きいと思います。

ふたつ目は、普及係の方で、事業体に対して、啓発とか色々と指導していただいた結果だと思えます。

みつつ目は事業主体さんの方でも、間伐材を活用して、なんとか地元に戻元しようという機運が高まってきているということです。特に飯伊森林組合さんの方は市場を持っていますので、道際の搬出できそうなところは、搬出して活用しようという取組が板についてきたということだと考えています。

(村松委員)

間伐実施状況の図面を作るという話があったのですが、これは今までなかったということですか、それとも、今まであったけれど、もっと分かり易く作るということですか。まあいずれにしても、どこが森林税で間伐されたのか全く分からない。他の事業で間伐されたところもあるし、間伐は森林税のメインだと思うので、専門家でなくても分かるような図面があれば非常によい PR になると思います。

それともう一つ、フォレストコンダクターというのがありますが、これはどういう立ち位置で活動されているのか、どういう場面でお目にかかれるのかお聞きしたい。

(事務局)

県では、これまで間伐の履歴を図面に残していましようということで、県全域で同じようにやることになっていたのですが、地方事務所によってやったりやらなかったりで、中途半端な状態になっていた。今度の北安曇の架空申請もそういうところから生まれたのではないかという反省を含めて、再度徹底していましようということになっています。

フォレストコンダクターについては、この地域では、飯伊森林組合に二人おられます。

制度の趣旨としては、この飯伊地域全体の林業を指揮していけるような人材を育てましょ

うということでスタートした事業です。ただ、1年研修を受けて、はいあなたはコンダクターということで、すぐに地域全体を指揮するような活動ができるかということ、なかなか難しいので、活動を徐々にしてもうための支援を継続していきましょうということになっています。どこで会えるかということ、コンダクターの立ち位置で活動している場面は今のところ下伊那ではできないので、全地域的な協議会といった団体もありますので、そういった中で存在感を示していけるように県としても支援していくといった状況です。

(事務局)・・・下伊那の間伐履歴の説明

今までは、アナログで図面に色塗りをして履歴を作っていたのですが、コンピューターの発達もあり、データベース化された森林簿というのがありますが、そこに間伐の実施履歴を入力することによって、実績を積み重ね、それを図化することが簡単に出来るようになったので、今までアナログだったものをデータとして入力して2014年度まで作ったところです。ただ、森林税で実施したものかどうかという履歴は、まだ出来ていません。

データ入力は、なかなか手間なので、人によって疎かになりがちですが、しっかりデータ作りに取り組んでいきたいと思っています。

データは森林組合に渡し、図面を見てもらって同じところを二回補助金申請しないようにと考えています。

森林組合か地方事務所に来ていただければ、画面上で何年に間伐したか確認できます。

(村松委員)

- ・ 何 ha という数字で説明をいただくより、こういった図面を示せば、「ああ、このくらい間伐が進んでいるのだなあ」とわかるようになります。山に関係しない方でも、少しはわかり易いのではないかと思います。また、年度ごとの色分けが出来れば更にいいかなと思います。
- ・ フォレストコンダクターの件ですが、山林所有者の意欲が年々低下して行って、若い人も山に興味を示さなくなっていくと、ますます林業が衰退していくと思うので、コンダクターの方が、強力なリーダーシップを取っていただいて、林業の方向性を何とか示して頂ければと思っています。

(林委員)

森林づくりというか、森林税を含めて関心を持ってもらうことというのが前提にあると思うのですが、木育推進事業のように、木に関心のない方が関心を持ってもらえるという事業がやられておりますが、こういった事業が続けていけるよう、そういった授業のあり方を見つけていくのが大事かなと思いました。

(伊東委員)

この会議に出席させていただき、森林に関心を持つようになりました。その中で大変刺激を受けた根羽村の取組(間伐材利用)で、大久保村長さんに相談し、2月24日に私が関わっている会議の20名くらいで根羽村へ行って研修をさせていただきました。その後、大鹿村の村長や村議18名くらいで続いて視察させていただき、しっかり刺激をもらいました。

そういう取組事例の良い所に視察させていただくと、それなりの材の使われ方が広がるのかなあと感じました。

それともう一つお聞きしたいのは、支障木が大変大きくなって、伐採するのに大変技術がいるということで、空師さんのような、そういう木を専門に伐ってくれる人が南信州にどのくらいいるか、森林組合とか地方事務所に行けばそういう業者さんがわかるのか。

(事務局)

空師さんという名前で職業を構えている人はいませんが、たとえば森林組合の場合、特殊伐採をしてくれるある程度技術をもった人がいます。また、伐採の業者さんで、大型クレーンが入る場合、そういったものを持ち込んで伐採することは可能です。なので伐採の業者さんとか、森林組合にご相談されればよいかと思います。

それと、やり方の問題ですが、その木が山から伸びてきて、家とかの邪魔になってしまうような場合、1本ですと難しくなってしまうので、その裏山全体の手入れをしていただくと、裏山もきれいになり、支障木も片付く、そういうやり方をすれば、費用も全体で薄まりますので、間伐の事業とかを活用していただく方法もあろうかと思います。あと、一本一本引っ張って伐るという方法もあります。少し割増しになりますが、多少補助金も出る場合がありますので、そういったことをご検討していただきながら、上手にやっていただくのが良いかと思います。

(矢島委員)

感想ですが、観光地とか田舎の方のお寺とか見に、暗い山道を上がっていく時に、こういうところを間伐とか木を伐ってくれれば、観光地として発展するのではないかと感じたことがあります。なので、その間伐の進め方(事業採択)、どのような枠で、どのような基準で採択されていくのか聞きたいと思いました。

林務課の皆さんのこういった山の仕事は、住民の目に見えない仕事で、一般の人達から見れば裏方の仕事で、皆さんの仕事に大変頭が下がる思いなのですが、歴史的な神社、仏閣があり、山道を通り過ぎるときにここはちょっと手入れが必要ではないかというようなところを間伐していただければ、本当に見ごたえがあるのになあと感じましたので、基準だとか枠だとか順番のようなどころをお聞きしました。

(事務局)

大事なお指摘だと思います。間伐など色々やりたい場所はたくさんあると思います。通常の場合ですと、地方事務所の方からここをやれということではなくて、事業者の方からあそこをやりたいとか、地域の皆さんが、ここが問題だからこら辺を間伐して良くしていきたいということが発端となって、それじゃ森林所有者はどうだろう、補助金の条件はどうだろうかと調べて、いけそうだとすると、所有者に交渉して集約化の事業を使っただきながら、間伐の承諾を取っていただく。承諾がとれたら、森林組合など事業者が実際に間伐をしていただく。そして今度はその材を搬出して市場などへ持って行く。そして補助金の申請をしていただき、私どもが事業を確認し補助金をお支払するということが一般的な流れとなっています。

また、それだけでなく、地域で漠然とよくないと思っていただけ、全然関係のない方からあの辺やった方がよいねということも非常に大切なことかなと思っています。森林税の関係で森林づくり推進支援金という事業がありますが、こちらの事業で森林景観整備ということをつかの市町村で実施されています。交通量の多いところとか、日影対策のようなどころとか、人通りの多いところとか、そういう道を重点的にやっていて、やはり行く道、沿道を綺麗にしていくというというような事業を市町村が実際にやっていただいております。ただ、予算的に十分でないものですから、一度に全部というわけにはいきませんが、こういったことも市町村の方でもやっていますので、こういったことがあれば市町村の方へ働きかけていただくと色々な面で地域が良くなるのかなと思います。また、私どもへもヒントを頂

ければと思います。

(新井座長)

3年間、地域会議で森林・林業関係を見てきましたが、その3年間の感想やご意見をお聞きしたいと思います。

(伊東委員)

私の家もかなり山持ちなんですけど、あまり山に関心を持っていなかったんで、この会議に出席させていただき大変勉強させていただきましたというのが一番の感想です。

この会議で気づいた色々なことを村へ帰って、少しずつ声掛けしていたら、徐々に、根羽村への視察の実施というようになりました。具体的に何か動いてみるという段階に今入り始めたのかなと思います。そういうことで、私はこの会議に出席させていただいて本当に勉強させてもらえたかなあと、本当に感謝しております。

(林委員)

私は、3年間の途中で、2年目の3回から参加させていただきました。私は飯伊の木材協同組合という立場で会議に参加させていただいているわけですけども、そういう面からいけば木材がより活性化されて使われるということに力を入れていく分野人間ですけども、やはり森林づくりものづくりというところからいきますと、製材をして材を普及・販売されるというところまで考えると、やはり安定したサイクルというのがないと、なかなか、どこかだけが発展するというわけにはいかないわけで、意外と難しいことだと思います。そんな中で、森林税を使う事業ということでもありますけれども、そういう形を行政が力を入れて今後のためにということで、やられているというのがいま現在やっているものだと思います。そういった立場にいながら、そういったことをあまり承知しているところが少なかったのかなと思いました。そういう面からいけば、地域の皆さんに関心を持ってもらう一つの手段として、そういった事業を進めていただけることはこれからも期待したいと思います。

(村松委員)

3年間という任期でありましたが、長いかなあと思いましたが、あっという間に終わったような気がします。

林業というのは息の長い産業です。私も20年30年やって次の代に引き継いで、林業ということ繋げていけるような体制をとれたらいいと思っている。この税金が投入されたのはありがたかった。今後も、意欲が低下しないよう応援していただければありがたい。

(矢島委員)

信越放送のラジオで、信州大学の学生さんが森林関係の仕事をやり始めたという話をききまして、感動しました。彼が言うには、森林の仕事は、日本をつくる基だから生きがいを感じているという。県外の人が長野県に住みついて、そこまでやってくれる人が大学生にもいるのだなど、とても感動しまして、信大の大学生さん達もこういう人たちもっと増やして、長野県の里山の森林を盛り立ててくれる人が増えたらと思いました。

私も、毎月開く消費者の会の例会に、この会議の内容をお話しているのですが、森林税というものが、普通の人は何に使われているのかあまりご存じでない。でも、この話を聞いて

いただいた人達がまた他の人達へ話をさせていただければ本当に有りがたいという思いで出席させていただきました。

(新井座長)

私からも、一言申し上げたいと思います、

色んな立場の方から森林税の活用以上に森に対する思いっていうものをきかせていただきまして私自身も大変勉強になりました。森林税の立ち上げの会議にもきて、厳しい中でも長野県の森林県としての森の大切さ、未来永劫に残していくという強い意志のもとで、森林税が立ち上がったという場を目の当たりにして、私自身補助金のあり方についてご協力をしたという思いで3年間座長をさせていただきました。

そこで、私の意見も述べさせていただきます。

ブランド化イコール独自化という意味とらえたときに、ブランド化とは、自ら生み出し、自ら育て、自ら守るということで、その守るということが自らできていない点で、今回の色々な問題になっているところだと思う。この逆境をチャンスに変えて、コンプライアンスを高めるだけでなく、(次の政策を考えてほしい。)

ここ3年間で社会的背景が変わってきていると実感しているところですが、住宅建築において一次エネルギーの削減がいわれており、長野県において300㎡未満の新築物件では、ソフトを使って環境エネルギー性能の計算をして指標を建築主に示さないといけない時代になっている。そうすると、当然、断熱材などイニシアルコストが上がってくるので、地域材を使った家づくりを続けていくのも結構難しくなっている。とても残念です。

もう一つは、石油の値段がかなり下がってきて、木質バイオマス事業には大変厳しい状況になってきている。森林資源をもう少し長いスパンでとらえ、社会の将来を見定めながら政策を続けていかないといけない。石油も今年度末には50%上がるんじゃないかといわれているので、木質バイオマス利用というのは、森林資源の活用のメニューとしてもっと大きな目標があってもいいと思う。

もう一つは、空き家の問題です。最近是全国的の空き家を何とかしなければいかんと。県でも、空き家を活用しようという話もあるのですが、建築的に言うと、空き家みたいな断熱、機密性の少ないものを改築しようとするとなかなか大きなお金がかかるので、空き家はCO2を増やさずに快適な室内環境を得るのは非常に難しい。なので、信州なりの一番いいやり方とすれば、木質バイオマスのCO2を出さない暖房器具で温かい環境を実現することだと思うし、長野県の魅力だと思う。

そういう意味で、山から里へと、間伐材の搬出が高まっていることは大変いいことで、施設課と建築課と手を組んで、信州の木を使って、信州の職人さん、信州の団体がつくる地場産業としての家づくりと環境エネルギー性能の高い木質バイオマスの一次エネルギーを使うことで、CO2削減の省エネ住宅づくりというのが、信州の家づくりで一番いい、という雰囲気作りが必要と思う。

その社会の動きの中で、山から里へ、材木やバイオマス含めた、「出すシステム」をしっかり作ることが今後の森林税のあり方、社会に認知されるあり方として、社会を作る潮目が変わってきていることを意識して、森林税の使い方も変えていく大事な時期に来ていると考えます。

(伊東委員)

ドイツへ行ったとき色々なところへ行きましたが、間伐がよくされていて、幹から枝まで大事な材として利用さ、無駄のない生活スタイルでした。大鹿村でも、村に新たに入ってきた人達は、みんな間伐材などの薪を使った生活をしているのに、残念ながら、元からいる住民はそのようなことをしていない。

(新井座長)

飯田下伊那では10数年前に定住人口を増やそうという話があった。じゃあ誰でも言いかというと、都会では絶対できない自然環境とか木質バイオマスのようになるべく化石燃料に頼らない生活をしたい人がたくさんいる。そういった魅力のあることを今から考えていかないと、10年後に間に合わない。高性能な家になって、エアコンを入れっぱなしでも電気代が高くない、温かくて快適だよという流れが最近出てきている。3.11の反省で原発・化石燃料を減らしていこうよという流れが続いていないというのが現実で、ここで信州ならではの生活を取り戻すことは大事な事なのかなと思う。

一通りの3年間のまとめた感想をいただきました。この辺でこのメンバーの最後の会議を閉じたいと思います。ありがとうございました。